

昨年度から運用容量算出方法を見直した事項と運用容量への影響

2022年3月1日

- 2022～2031年度の運用容量（年間・長期）算出にあたり、昨年度から算出方法を見直した事項は、意見募集実施後、2022年度以降の運用容量に反映することとした以下の2項目。
- 熱容量限度値の算出方法を見直したことで、**関西中国間連系線において、冬季の熱容量限度値が上がり、昨年度算出時に比べて、11～4月の運用容量（中国向）が48万kW増加した。**

項目	対象となる連系線	見直し内容	期待できる効果	運用容量への影響
(1)同期・電圧安定性限度値の算出方法	<ul style="list-style-type: none"> ・中部関西間連系線 ・北陸関西間連系線 ・中国九州間連系線 	<ul style="list-style-type: none"> ・運用容量が周波数維持限度値で決まっている連系線において、同期・電圧安定性限度値を設備上の上限値である冬季熱容量限度値まで確認し算出する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・緊急時に運用容量拡大の判断が必要な場合において、周波数維持限度値が制約となっている連系線に関しては、より迅速な運用容量拡大の判断を行えることが期待できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・対象となる連系線において、同期安定性で決まっている運用容量については、昨年度も設備上の上限値まで同期安定性限度値を確認し算出しているため、運用容量への影響なし
(2)熱容量限度値の算出方法	<ul style="list-style-type: none"> ・中部関西間連系線 ・北陸関西間連系線 ・関西中国間連系線 	<ul style="list-style-type: none"> ・改めて夏季・冬季の熱容量を整理した結果、夏季熱容量より大きい冬季熱容量が明確になった連系線において、夏季熱容量限度値に加えて、新たに冬季熱容量限度値を算出する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・運用容量の決定要因の一つである冬季の熱容量限度値が上がる。 ・緊急時に運用容量拡大の判断が必要な場合において、周波数維持限度値が制約となっている連系線に関しては、より迅速な運用容量拡大の判断を行えることが期待できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・関西中国間連系線において、昨年度算出時に比べて、11～4月の運用容量（中国向）が48万kW増加 ・中部関西間連系線、北陸関西間連系線は、年間を通じて決定要因が熱容量とならなかったため、運用容量への影響なし

■ 2022・2023年度の運用容量を算出した結果、関西中国間連系線運用容量（中国向）の決定要因は熱容量となり、**11～4月の運用容量が278万kWから326万kWへ増加（+48万kW）**した。

【昨年度算出結果】2021・2022年度 関西中国間連系線運用容量（中国向）

【万kW】

連系線名称	断面	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
関西中国間 連系線	平日	昼間	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)
		夜間	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)
	休日	昼間	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)
		夜間	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)

() 内の数字は、運用容量決定要因（①熱容量等、②同期安定性、③電圧安定性、④周波数維持）を示す。

【今年度算出結果】2022・2023年度 関西中国間連系線運用容量（中国向）

【万kW】

連系線名称	断面	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
関西中国間 連系線	平日	昼間	326(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	326(①)	326(①)	326(①)	326(①)
		夜間	326(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	326(①)	326(①)	326(①)	326(①)
	休日	昼間	326(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	326(①)	326(①)	326(①)	326(①)
		夜間	326(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	278(①)	326(①)	326(①)	326(①)	326(①)

() 内の数字は、運用容量決定要因（①熱容量等、②同期安定性、③電圧安定性、④周波数維持）を示す。

2022年度以降の熱容量限度値算出方法の検討結果

11

- 中部関西間連系線、北陸関西間連系線、関西中国間連系線の2022年度以降の熱容量限度値を算出する際は、夏季熱容量限度値に加えて、新たに整理された冬季の熱容量を用いて冬季熱容量限度値を算出する。
- 両端の冬季熱容量が異なる中部関西間連系線、北陸関西間連系線については、設備損壊リスクを考慮して、まずは小さい方の冬季の熱容量を用いることとする。

赤字：熱容量限度値算出に用いる熱容量

連系線	夏季の熱容量	冬季の熱容量
中部関西間連系線	278万kW	311万kW (中部) 326万kW (関西)
北陸関西間連系線	278万kW	306万kW (北陸) 326万kW (関西)
関西中国間連系線	278万kW	326万kW

※ 熱容量は設計条件（周囲温度・日射量・風速等）により決定されるが、これらには地域差がある

新たに整理された冬季の熱容量